

会 議 録

- 1 付属機関等の会議の名称
第2回（仮称）篠山市参画・協働プラン策定委員会
- 2 開催日時
平成24年7月25日（水）13時30分～15時30分
*傍聴の受付時間（午後1時00分から午後1時30分まで）
- 3 開催場所
篠山市役所本庁舎3階 301会議室
- 4 会議に出席した者の氏名（敬称略）
 - (1) 委員
小森星児、中塚雅也、直田春夫、西田武司、西潟弘、小林典幸、江坂道雄、杉本稔、
中西文枝、向井千尋、赤穂利和、土性里花、上田英樹、堀毛宏章
 - (2) 執行機関
市民協働課 赤井毅彦、西羅忠和、中野悟
- 5 傍聴人の数
0人
- 6 議題及び講義の公開・非公開の別
すべて公開
- 7 非公開の理由
—
- 8 会議資料の名称
 - ・次第
 - ・資料1 第1回の委員会（H24.6.22）から
 - ・資料2 （仮称）篠山市参画・協働プラン策定委員会 話題提供について
 - ・資料3 （仮称）篠山市参画・協働プランの内容（案）
 - ・城南地区まちづくり
 - ・大芋活性化委員会の設立とその背景
 - ・「ここに住んでよかった」と思える地域を目指して
 - ・風和通信
 - ・NPO法人 風和

9 審議の概要

(1) 開会

(2) あいさつ

小森委員長

(3) 協議事項

① 前回のふりかえり

事務局より説明（資料1）

② （仮称）参画・協働プランの内容について

事務局より説明（資料3）

③ 今後の進め方について

事務局より説明（資料2）

④ 協議

<話題提供>

●西潟委員（篠山市自治会長会副会長 野中自治会長）

人口が増加した開発地域の自治会。新旧住民が混在する中での子育て支援と、まちづくり協議会（以下「まち協」）と連携した自治会活動について説明。

- ・開発後今なお人口は増加傾向だが、市内で、野中より先に開発された地区では人口減少が始まっている
- ・老人会や地元有志が通学児童の見守りを行っているほか、自治会も地区の活動（まち協の活動）とも連携している。
- ・自治会として、どのような子育て支援ができるかが課題。
- ・自治会役員に負担が多いため、6年間続いた防犯活動を廃止した。

◇質疑応答

<各種団体との関係は？>

- ・当地区はNPOで学童保育をやっている。自治会やまち協でする事業と、NPOでする事業の使い分けをしている。

<学童保育は市の施策の補完が目的での設立か、地区独自の必要性からの設立か？>

- ・子どもの居場所づくりとしてまち協が独自に立ち上げた。

●江坂委員（大芋活性化委員会事務局長）

人口が減少していく地区で、大芋活性化委員会（大芋地区のまち協）が誕生した背景と、設立後に取り組んできた事業について説明。

- ・活性化委員会が出来て7年。最初の4年は、県補助事業を活用したハード整備、次の3年は「地域を元気にしよう！」とソフトの活動に移行した。
- ・高齢化する地区をなんとかしようと、移送サービスや高齢者を対象にしたサロン、地区内を元気にしようとする事業が始まった（事業が増えた）。

- ・毎年人口が 26～7 名減少している大芋では最近、地区外に向けての都市農村交流など情報発信に取り組んでいる。
- ・過去 7 年の取り組みで、地区が少しずつ元気になり始めた。
- ・次の世代をどうやって育てていくかが課題。

◇質疑応答

<各種団体との関係は？>

- ・活性化委員の立ち上げを自治会長会が各種団体に呼び掛けて行った。まちづくりをどうするかという話し合いには、コーディネーターに入ってもらった。NPOではないが、都市農村交流では阪神間で農村環境を守る活動を展開している劇団と連携した。

<移送サービスについて>

- ・利用は、公民館活動への参加や買い物、病院通いなど。介護保険での法制度の中での利用ではなく、制度の域に達しておらず、制度の枠に入らない人が使えるシステムをつくりたいと思って実施している。
- ・新聞にも利用者の言葉として「ここに住んでよかった」との声が載っている。地区住民には喜んでもらっている。
- ・ガソリン代、駐車料金、高速料金の必要経費は負担いただく。運転者の車を使うが、制度上、車の維持費は負担してもらわない。

●向井委員（NPO法人 風和）

子どもからお年寄りまでが集まれる場所をつくりたいとの思いから 10 年以上前に NPO を設立。地域の人達に支えられながら続けてきた活動について説明。

- ・NPO 風和は、子どもからお年寄りまでが集まり、自分を表現できる場所をつくることを目的に設立。
- ・30～40 代の女性は「子育て中だが、社会とつながりたい」との思いから、自治会長や老人会長など、地域の核となる人たちは「いいことだ！」との意見で NPO 設立に賛同してくれた。
- ・介護保険事業所としてデイサービス事業や訪問介護事業や、市内のまち協の福祉部門とも連携して事業を実施している。
- ・篠山での子育てを一緒に考え、篠山の魅力を伝える活動や、震災被災者が篠山でゆったり過ごすことができるための活動を行っている。
- ・風和の活動が続けられるのは、地域の応援があることが大きいと思っている。
- ・市内には公共の福祉施設もあるが、NPO だからできる地域福祉をしたい。

◇質疑応答

<各種団体との関係は？>

- ・NPO の理事に地元の自治会長や民生委員、老人会長が入っており、年 4 回の

理事会で事業や会計の報告をしている。

また、市内の複数のまち協のサロンの支援を行っている。

<風和ボランティアの会とは？>

- ・保険の関係もありボランティアを登録してもらっており、登録は増加傾向で、随時30名程度。

<意見交換>

<自治会とまち協の関係>

- A-1 未だ篠山市に「まち協」の概念は無かった当時、人口の減少と少子化高齢化が進むなかで、地区の元気やコミュニティの力が弱っていくことを敏感に感じ取った自治会が地区内のすべての団体に呼び掛けてまち協を立ち上げた。田舎であるため自治会の力が強いが、まち協と自治会のつながりは良い。
- A-2 地域住民と太いパイプを持っているのは自治会であり、人を集めるとなると自治会にお願いしなければならない。行政から降りてくる仕事は自治会の活動分野になる。まち協の活動は行政から依頼されてやるものではなく、少なくともしようとすればいくらかでも少なくできるが、地域の抱える課題があるために新たな活動がどんどん増えて事業仕分けが必要になってくる。
- A-3 我々の地区では設立の際に「自治会長は集落で選ばれた長。まち協は地区全体のもの。自治会長は単位自治会の取りまとめや仕事をするべきではないか。(相互の連携で地域づくりをして行こう)」と言った。初期はぎくしゃくしたが最近は落ち着いている。

<自治会、まち協役員の負担増の課題>

- B-1 まち協が出来て、従来の自治会の事業のほかに移送サービスやサロン、都市農村交流などの事業が増えた。数年で交代する自治会長には、単位自治会の事業に加え校区全体のことをするととなると忙しく、事業仕分けをしようとの意見も出ている。
- B-2 (A-2の再掲)まち協の活動は行政から依頼されてやるものではなく、少なくともしようとすればいくらかでも少なくできるが、地域の抱える課題があるために新たな活動がどんどん増えて事業仕分けが必要になってくる。
- B-3 30代~50代の者を役員にしようとするが、例えば、消防団員であれば日曜日は全てつぶれてしまい、参加できるのが夜間のみといった場合もある。地区内での移送サービスも全て65歳~70歳過ぎのリタイヤ組でやっている。どうやって引き継いでいくかが課題。
- B-4 一つの役を受けると複数の役が付いてくる。自治会の役員には現役世代もなるが、昼間の会には休みがち。現役世代には平日の割り振りは厳しいので、リタイヤ組に回ってくる。これはどこの集落も同じではないか？

<自治会、まち協内のネットワーク>

C-1 今はタテの仕事をヨコに広げないと大変なことになると思い、単位自治会内や地区内でのつながりをつくることに取り組んでいる。

福祉委員や民生協力委員は、行政からの縦割りだけの仕事で、実際の集落の活動はできていない。

この状態をどうにかしようと、安全安心ですみよいまちをつくる懇話会を開いている。

<まち協内の事務局体制>

D-1 まち協事務局体制で、朝来市では事務局員を雇う費用として自治協（篠山市のまち協）単位に、年間180万円が交付されている。事務局をきちんとしないと、あれだけの活動をするのは大変だと思う。

D-2 当地では自営業の方が半ボランティアで事務局をしている。少額が支給されているが、現在見直しを提案している（生活の基盤を確立する必要がある）。

D-3 自治会の事務局は自治会長のうちの一人があたっており、まち協事務局は年3万円であった報酬が本年度から年6万になった。拠点には事務員として500円/hで地区の人に来てもらっている。

D-4 当地では市からの補助金により、有償で会計処理などの事務を行う事務局員を置いており、週4日間の午前中勤務しているが、会長や事務局長は無報酬。

D-5 当地では平日の午前10時から午後4時まで拠点を開けているが、会員がボランティアで半日ずつ当番をしている（2ヶ月に1回程度）。

D-6 当地のコミセンには事務員が常駐。週4日勤務で月5万円。まち協の事務局は自治会長のOBなどがボランティアであたっている。

<新旧住民の融合>

E-1 旧住民と新規に転入してきた住民との融合を図るのが難しい。旧住民はしきたりを重んじるが、新規住民は自然環境や利便性を求めて転入してくる。この差を自治会がいかにして融合させていくかが自治会内での課題。

<足りない面を補い合えるシステム>

F-1 テーマ型の活動をしているが、我々の委員も多くないため、ひとりが複数の役を抱えなくてはならず、広報や準備に十分手が回らず、いい催しを計画しても人が集まらないこともある。忙しい状況でも委員が役割分担したり、サポーターなどが協力できないかとの課題を抱えている。

<NPOと地域の連携>

G-1 NPOと地域の馴染みが悪いところも存在するが、風和が地域に支えられて

やれている背景には、地域と向井さんの活動のストックがあるからだと思う。

<プランのまとめ方>

◇わかりやすい資料とするために

H-1 プランのなかに、具体的な活動事例を入れたほうがよくわかる。

◇プランのレベル

H-2 参画・協働プランのレベルでどこまでまとめるのか？

指針や心得程度の抽象的なレベルで「こういったものを良しとします」とするの、具体的な内容を計画としてまとめていくか？

H-3 あまりプランという言葉にこだわらないでいいと思う。

むしろガイドラインと言う方が確かかもしれない。

H-4 地域自治システムの話は策定委員会では全部取り扱えないと思う。

事務局体制や行政との関係性をなど具体的な内容は別途行った方がよいと思う。

◇他市の例の提示

H-5 委員会に、兵庫県や他市町の協働の進め方や評価の仕方などの仕組みを提示しては。